時の螺旋

兼高由季

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
時の螺旋

【Ｎコード】
Ｎ３５５２Ｆ

【作者名】
兼高由季

【あらすじ】
坂本直哉の最大の欠点は好奇心に引きずられてしまうこと。いつの日か好奇心のために身をほろぼすなどと言われている。時の螺旋にとらわれた不思議な少女と、彼女に興味を持った男の子の物語。

1. 電波系の彼女

水原沙耶に興味を持ったのは、席替え後、間もなくのことだった。
二年のクラス替え以来、廊下側の最後列に座っていた水原は、後ろから二番目の窓際に移動し、教室のど真ん中だった俺の席は窓際の一番後ろ、つまりは水原の真後ろになった。

ウチの学校の女子の制服は可愛いと評判だけど、その秘密はほとんどの生徒がスカートの丈を膝上十センチまで短くしているからだ。
水原のスカート丈はその逆の膝下十センチ。
トレードマークは、だっさい三つ編みと黒縁セルフレームのビン底眼鏡。
茶髪も巻き髪もメイクも香水も当たり前で、制服なんて着崩すためにあるのだと思っている連中の中で、あきらかにその存在は異質だった。

「外れだな」
ため息まじりの呟きに、水原の三つ編みがかすかに揺れた。
けれども盛大にため息を漏らしていたのは初めの頃だけで、俺はあることがきっかけで、猛烈に水原のことが気になりだした。
そして今、俺の最大の関心事は、二ヶ月前に付き合い始めた彼女のことでもなければ、いくつか掛け持ちしている部活のことでもなく、水原の電波ぶりを観察し、その謎を突き止めることになっている。

祇園精舎の鐘の声
諸行無常の響きあり
沙羅双樹の花の色
盛者必衰のことわりをあらわす
おごれる人も久しからず

ただ春の夜の夢のごとし
たけき者もついには滅びぬ
ひとえに風の前の塵に同じ

古文の時間は今日もよどみなく進んでゆく。
教師は生徒を無視しで授業を進め、生徒は教師を無視して内職に没頭し、時だけがとどまることなく流れてゆく。

水原はと言えば、きちんと背筋を伸ばし、一見、授業に集中しているように見えるけど、時折、窓の外を気にしている。
さりげなく観察を続けていると、水色のシャーペンがすっと持ち上がり、何もない空間に字を書いた。

（あ・と・で）

俺の胸がどきんと一つ鼓動を打つ。
「あとでって？」
少し身を乗り出してささやくと、制服の肩がぴくりと震えたが、水原は決して振り返らない。
何事もなかったように黒板に向かう背中から目を逸らし、窓の向こうに目をやったけど、どんなに目を凝らしても、そこには泣き出しそうな曇天が広がるだけだ。
窓を開けて思い切り手を伸ばすと、小さな水滴が手のひらにはりついた。
二時間目が始まったばかりなのに、にわかに放課後が待ち遠しくなってきた。

「ストーカー？」
ターゲットの後を追うべく席を立つと、背後から肩をつかまれた。
仰け反りながら振り返ると、桐谷匠が華やかな微笑を浮かべて立っ

ていた。

「直哉は物好きだな。あんなブスのどこがいいんだ？」
きれいな顔をして桐谷はかなりの毒舌家だ。
俺はフンと鼻を鳴らし、肩に置かれた手をそっけなく振り払った。

「どうしてブスだってわかるんだ？　お前、あいつの顔を見たことあるのか？」
わざと真顔で訊ねると、桐谷は珍しくうろたえた。
そりゃ、そうだ。水谷の場合は眼鏡のレンズが厚すぎて、ブスという以前にどんな顔をしているのかさえわからない。

桐谷がおとなしくなったので、俺は探索を開始した。
校内を探し回るまでもない。
水原は人気のない中庭にポツンと一つだけ置かれたベンチの端に座っている。
いつだって、たった一人で座っている。

「離れて座ってね。しゅうちゃんに悪いから」
水原は滅多にしゃべらない。
けれどもその声は、意外にもふんわりと温かで、耳に心地よい。

（しゅうちゃんって、誰だ？）
心の中で自問している間も、奇妙な会話は続いてゆく。

「……そりゃあ、話ぐらいは聞いてあげられるけど……」
切れ切れに聞こえてくる言葉に俺の表情は次第に険しくなってゆく。
植木の陰に身を潜め、水原の隣の空間に目を凝らしたが、やっぱり何も見えなかった。

水原沙耶はいかれている。
成績はダントツトップだけど、天才と何とかは紙一重だなんて言うじゃないか。
だから、こんなストーカーまがいのことはやめてしまおう。
大半の人間がそんな風に考えるだろう。

大きく一つ深呼吸をして、俺はその場に立ち上がった。
「水原じゃん、何やってんの？」
たまたま通りがかった風を装って、ひらひらと手を振りながらベンチの方へと歩み寄る。
水原は身じろぎもせずに固まっていた。
席は前後ろとは言え、ろくに口をきいたこともない相手から、親しげに名を呼ばれて、驚いているのかも知れない。

「隣、座っていい？」
「だめっ！」
ほとんど反射的に返ってきた拒絶の言葉を無視してベンチに腰かけようとした途端、俺は何かに突き飛ばされていた。

三メートルばかりも吹っ飛んで、顔面から地面に直撃した俺は、うめき声を上げつつ身を起こしたが、地面についた手にポタリと落ちた赤い液体を見て絶句した。
「大丈夫！？」
飛び立つような勢いで、水原が駆け寄ってきた。
差し出されたハンカチを押し返し、手の甲で鼻血を拭った時、背後でくすりと笑う声がした。

いつからそこにいたのだろう？
俺が腰かけようとした場所に学生服を着た少年が座っていた。
その輪郭が曖昧であることに気をとられ、彼が身につけている学ラ

ンが十数年前に廃止されたこの学校の制服だということに、その時は気付きもしなかった。

「沙耶ちゃんに、なれなれしく近づいたりするからだ」
少年がベンチから立ち上がると、俺は金縛りにあったように動けなくなった。
茫然としゃがみ込む俺を庇うように、水原が両手を広げて少年の前に立ちふさがる。
その足元には、ビン底眼鏡が転がっていた。

「沙耶ちゃんは、君のものにはならないよ」
毒を含んだ声にぞっとした。
「俺には……」　俺にはちゃんと彼女がいて、水原に手を出す気はサラサラない。
そう言おうして、咳き込んだ。
喉を絞められたように、息ができない。
急速にかすれてゆく意識の向こうで、水原の声を聞いた気がした。

意識を飛ばしていたのは、ほんの短い時間だったと思う。
ほっとして息をついたのと、水原の背中がぐらりと前方に傾いだのは、ほとんど同時だった。
鼻血まみれの手で咄嗟に水原を支えた時、俺の足元でいやな音がした。
眼鏡のひしゃげた音だった。
けれどもやばいと思ったのは一瞬で、俺の目は水原の顔に釘付けになっていた。

色が白いのは知っていたけど、血の気を失った白い頬は本当に透けるようだった。
「……ありえねえ……」

思わず漏れた声が自分のものではないように上ずっている。
これほど整った顔を見たことがない。
やわらかく閉じたまぶたを縁取る長いまつげはまぎれもなく天然で、おおた慶文の描くちょっとレトロな美少女みたいだ。

抱き上げた身体は羽根が生えているかのように軽かった。
予想外に軽さによろめきそうになりながら、俺はベンチをかえりみた。

「学ラン」はどこへ行ったのか。
その姿は夢のように掻き消えていた。

2．学ラン

翌日の昼休み。俺は指導室に呼び出された。

「何をやった？」

「さあ」

「このクラスになってから何回目？」

「……七回目」

唇を尖らせた俺を見て、桐谷はハハっと笑い声をはじかせた。
机に腰掛けたまま長い足を見せ付けるように組みかえたのは、教室の隅にたむろしている女子の視線を十分に意識してのことだろう。
とやかく言う立場じゃないけど、見ているこっちがはずかしくなってくる。

「不良ってわけでもないのに、なんで直哉ばかりなんだろ？」
かきあげた髪の隙間から銀のピアスがチラリと覗く。
そうだよな。女をとっかえひっかえしているこいつに比べたら、俺の方がはるかに人畜無害だ。

「ひょっとして、吉原に惚れられてんじゃないの？」というふざけた言葉とその他もろもろの冷やかしの声を背中に聞きながら、長い廊下を進んでゆく。
足取りを重くしているのは、目の前に控えている指導室なんかじゃなく、水原が学校に来ていないことだった。

「水原の顔にハンカチをのせたのはお前だな」
指定された椅子に座った途端、犯人を追い詰めた刑事のような顔ですごまれて、俺は目を見開いた。

「小学生じゃあるまいし、低レベルなイジメにもほどがある」
「はあ？」と大げさに驚く俺を、担任はしかめっ面でにらみつけた。
「水原みたいな真面目でおとなしい子はイジメのターゲットになりがちだ。特にお前みたいな目立つ生徒が動けば、他の生徒も……」
教師の言葉は、ほとんど耳には入らなかった。
俺はできるだけ殊勝な顔をして、担任の説教を聞き流すことにした。

「小学生なみで悪かったな」
後ろ手でドアを閉めた時、空しさがこみ上げてきた。
確かにバカなことをした。
でも、指導室に呼び出すほどのことじゃないだろう？

午後の授業はとっくに始まっていて、教室のドア越しに教師の声が聞こえてきた。
教室のドアを細く開けて中をうかがうと、窓際の後方二つ――俺と水原の席が空いていた。
回れ右した俺の足は、勝手に中庭へと向かってゆく。
暗く陰鬱なこの場所には人目を憚るカップルすら近づかない。

古ぼけたベンチの手前で足を止め、ゆっくりと周囲を見回した。
桜の巨木が四方に枝を広げているだけで、水原のことを沙耶ちゃんと親しげに呼んでいた「学ラン」の姿はどこにもない。
恐々とベンチに腰を下ろすと、ギシリときしむような音がした。

昨日の放課後。
水原を抱えて保健室に駆け込んだ時、保健室のおばさん、もとい、養護教諭はいなかった。
でも、鍵はかかっていないから、校内のどこかにいるはずだ。

足でドアを開け、ぐったりした身体を保健室のベッドに横たえて、耳元で名を呼んでみたけど、水原は全く動かない。

（ちゃんと息をしているんだろうか）

ベッドに横たえ、じっと顔を覗き込んでいるうちに、俺はだんだんと不安になってきた。

口元に手をかざして、ほっと胸を撫で下ろす。

幾度かそんなことを繰り返した後、養護教諭を探しに行った。

保健室を出る前に水原の顔にハンカチをかけたのは、担任の吉原が考えているような理由ではなかったが、そのことを理解してもらうには、水原の素顔を見た時の衝撃について語らなくてはならず、そんなことをするぐらいなら、イジメ男にまつりあげられている方がはるかにましだった。

「それにしても、あの学ランは何だったんだ？」

問いかけるように呟いた時、風もないのに桜の梢がざわめいた。

背後を振り返った俺は、ホラー映画の主人公みたいな顔をしていたと思う。

おっかなびっくり立ち上がり、桜の木を一周して戻ってくると、学ランがベンチに座っていた。

「お、お、お、お前！」

無遠慮に指差すとむっとしたように眉根を寄せたけど、攻撃をしかけてきたりはしなかった。

「僕の名前は学ランでもお前でもない。須藤正樹だ」

ぷいとそっぽを向いた相手を見て、俺は片眉を持ち上げた。

心なしか元気がない。

輪郭があいまいな上、微妙に透けて見えるからそう思うのかも知れないが、悄然と肩を落とした姿は昨日とは別人のようだ。

「須藤クン、なんか、落ち込んでる？」
場違いな質問を口にすると、須藤クンは何も答えずに目を伏せた。
「俺の名前は坂本直哉。ね、そっち行ってもいい？」
愛想笑いを浮かべると、じろりとこちらを流し見て、「変わってるね」と呟いた。
確かに俺は少し変わっているかも知れないけど、須藤クンほどには変わっていない。
浮かんだ言葉を飲み込んで、俺はベンチに腰掛けた。

「沙耶ちゃんを助けたいんだ」
ぽつりと呟く声は苦しげだった。
「でも、僕じゃだめなんだ」
そう言って頭を抱える姿は、まぎれもなく同じ年頃の少年だ。
「須藤は水原が好きなんだ？」
どんどんなれなれしい口調になってゆく俺に、須藤は複雑な顔をしたが、意外にも素直に頷いた。

「ふーん」と呟いて、さりげなく相手を観察した。
輪郭が曖昧なことを差し引いても、須藤はきれいな男だった。
桐谷みたいな男前じゃなく、線が細くて女の子みたいな男の子。
眼鏡を外した水原と並べたら、古風な美少女と美少年でお似合いだろう。

「で、助けたいってどういうこと？」
軽く身を乗り出した時、須藤の姿がふわりと消えた。
茫然と佇む俺の耳朶を打ったのは、水原の声だった。

3．名前

トレードマークのビン底眼鏡に二つ分けの三つ編み。
いつもと変わらぬ姿で目の前に立たれても、今の俺には別人にしか見えない。

「どうしてここにいるの？」
「須藤と友達なんだ」
しれっとした顔で告げると、色白の頬に朱がのぼる。
どうやら怒らせてしまったらしい。
でも、これまでのように無表情でスルーされるよりは、ましだろう。

水原沙耶に対する俺の興味はうなぎのぼりだ。
たとえ彼女が噂通りのブスだとしても、ちっとも構わなかったけど、やっぱり美人の方がいい。
「眼鏡、直したんだ？　残念だな。俺、すっごく期待してたのに。なあ、眼鏡をかけないで校内を一周してみろよ。明日の朝には告白の嵐だ」
おどけていられたのは、腕をつかまれるまでだった。

「あ、あの、水原？」
返ってくる言葉はない。
強引に連行されながら、首をよじってベンチの方を見ると、須藤がぽつりと立っていた。

「消えたり現れたり便利だな」
何気なく呟くと、水原が呆れたようにこちらをかえりみた。
「怖くないの？」
「同じクラスの女子が怖がっていないのに、なんで怖がるわけ？

そんなことより、俺をどこへ連行するつもり？」

「あっ！」という小さな叫びとともに離れた手を、今度はこっちがつかまえた。
グラウンドでは一組と二組の連中が体育の真っ最中だ。
ひたすら走らされている連中がてんでにこちらを指差して口々に何か叫んでいる。
体育教師に見つかったらかなりやばい。
たぶん、いや、絶対、指導室に逆戻りだ。

水原の手を強引に引っ張って、裏門から外に飛び出すと潮の香りがした。
陰鬱な空の色を映して暗い海。
少し走っただけなのに、水原は息も絶え絶えだ。
それなのに、吸い寄せられるように、ふらふらと海へと近づいてゆく。
「危ない」と思った時には、勝手に身体が動いていた。

背後から抱きしめた身体は、昨日、抱き上げた時の印象そのままに華奢だった。
もう少し、力を入れたら壊れてしまうかも知れない。
（俺って、結構、浮気者かも）
心の声が聞こえたかのように、水原が俺の身体を押しのけた。

「さわらないで！」
どこか、泣きそうな声だった。
そんな風に拒絶の言葉をぶつけられたのは初めてで、少しだけ傷ついた。
「ごめん」と小声で謝ると、水原は小さく首を横に振った。

「須藤君と話ができるの？」
「うん」と返事すると、いつからだと重ねて訊ねられた。
医者の問診を受けているようで妙な感じだ。
けれども、水原が発する真剣なオーラに抗えず、俺は次々と発せられる問いかけに大真面目な顔で答え続けた。

ひとしきり質問を終えた後、水原は口をつぐんでしまった。
俺の存在など忘れて、ただ、波の音を聞いているようにも見える。
「すっごく迷惑そうだけど、接点を作ったのはそっちなんだから、責任を取れよ」
砂浜に転がった流木の端と端とに腰かけている俺たちの間には、不自然なほどの距離があいていた。
空いている距離を一気に詰めてしまいたい衝動と戦いながら、わざと不機嫌な声を出してみた。

水原は心から悔いているに違いない。
あのひとことがなかったら、俺は一生、水原に興味を持つことはなかったはずだ。
すれ違いざまにかけられた言葉は消え入るように小さかったけど、強烈なインパクトをもって俺の鼓膜を震わせた。
「よしえちゃん」
はじかれたように振り返った俺を見て、水原ははっとしたように後ずさり、回れ右して駆け出した。

ほとんど無意識に発したものに違いない。
よしえちゃん……坂本芳江。
それは、昨年亡くなった俺の曾祖母の名前なのだ。

4. 好奇心

「幽霊が見える？」
佐倉みちるは、ぱっちりとした大きな目を、さらに大きく見開いた。
「そんなことを言われて、本気にしちゃった？」
「そ、本気にしちゃったの」
俺はベッドから身を乗り出して、転がっている服を拾い上げた。

「やだなあ、もう」
みちるは口元を押さえて笑っている。
こいつの反応はノーマルだ。
誰だって、自分で体験したのでなければ、簡単に信じたりはしないだろう。
でも、なんか、おもしろくない。

佐倉みちるは、すれ違う人が振り返るほどの美少女だ。
二ヶ月ちょっと前から付き合い始めた俺の彼女でもある。
桐谷が佐倉にふられたという噂が何となく流れてきて、あいつが女にふられるなんて珍しいこともあるもんだなんて思っていたら、いきなり屋上に呼び出されて告白された。

断る理由なんてなかったし、短いスカートから伸びる長い足にもそそられた。
俺の周りには「佐倉は純情ぶっているけど絶対処女じゃないぞ」なんて言う奴もいて、それが事実かどうか確かめたかったこともある。
好奇心に引きずられてしまうのは俺の最大の弱点だ。
桐谷あたりに言わせると、俺のようなタイプはいつの日か好奇心のために身をほろぼすことになるのだという

まことしやかに流れていた噂は本当だった。
みちるが震えながら俺にしがみついていたのは、ことが始まってから十分ぐらい。
その後は……。
もちろん、俺だって初めてじゃないわけで、イマドキの高校生なんてこんなものだ。

（でも、水原は２００％処女だろうな）

彼女とセックスしながら、そんなことを考えている俺は、はっきり言ってかなりやばい。
でも、暴走する好奇心は抑えられない。

水原には、地縛霊、浮遊霊、生霊、エトセトラ、あらゆる霊が見えるらしい。
二人して学校を抜け出したあの日、滅多に口を開かぬ電波少女が、信じられないほど多くの言葉を駆使して語ってくれたのは、身の毛もよだつ怪談だった。

「真夜中に苦しくなって目が覚めるの。そうすると、日本人形みたいな三歳ぐらいの女の子が胸の上に正座して、小さな両手で私の首を絞めているの。胸が重くて、息ができなくて、何とかしようにも身体が動かない。そんな日が何日も続いて、気がついたら、別人みたいにやつれていて……」

普通の顔で――眼鏡のせいで実際は表情なんてわかんないけど――怪談を口にする三つ編み少女の図はかなり怖い。
恐怖で顔をひきつらせながら、俺は水原の話に耳を傾けた。
平和公園界隈と、岩国駅近くにあるとある店舗の地下には、原爆や空襲で亡くなった人の霊が大勢うごめいていて、近づくだけで具合

が悪くなるとか、中庭の幽霊――須藤正樹の話だとか、楳図かずおが手放しで喜びそうな話を淡々と語り終え、こほりと一つ咳払いをした。

「だから、私には近づかないで」
きっぱりと告げられた時、この言葉を告げるためだけに、水原がここにいるのだと気がついた。
「霊感が強い人は私のそばにいると危険なの。見えないはずのものが見えたり、聞こえないはずのものが聞こえたり、そして最後には引きずられてしまうのよ」

どこへ引きずられてゆくのか知りたかったけど、喉まで出かかった問いかけを、俺はごくりと飲み込んだ。
あらゆる質問を拒絶する水原の背中が、みるみる小さくなっていく。
まるで、古い映画のワンシーンみたいだった。

「あのまま、水原を帰してしまったのは失敗だったな」
何気なく呟いた時、銀色の閃光が暗い闇を斜めにつんざいた。
バリバリという耳をふさぎたくなるような雷の音に、激しく降り始めた雨の音が重なったのを合図に、部屋の電気がふっと消えた。

タクシーを呼んで、みちるを帰らせたのは正解だった。
わくわくしながらその時を待ったけど、幽霊が現れる気配はない。
（よしえちゃん、よしえちゃん、よしえちゃん……）
頭の中で果てしなくリピートされる水原の声を聞きながら、窓の外を眺めていた俺は、ふと思い立って、クローゼットの中を覗き込んだ。

最初に取り出したのは懐中電灯。
次に取り出したのは引越し用のダンボール箱。

ここに引っ越して来た時に、唯一持ってきたその箱の中には、当時大切にしていたものに混じって、ばあちゃんの遺品が入っている。

古びたアルバムに挟み込まれたセピア色の写真。
写っているのは俺が知っているばあちゃんではなく、確かに「よしえちゃん」だった。

よしえちゃん――まん丸顔の小柄な女の子は、右隣りに立つ子と仲良さそうに腕を組み、あどけない笑顔を浮かべていた。
彼女も含めて写真の中におさまっている女の子は全部で六人。
いずれもセーラー服にモンペ姿で、背景には木造校舎が写っている。

「ばあちゃん、けっこう可愛いじゃん」
懐中電灯を写真に当てながら、軽く口笛を吹いたまでは良かったが、冷静でいられたのは、そこまでだった。
よしえちゃんと腕を組んでいる子の顔を見て、俺は悲鳴をあげそうになった。
ダサい眼鏡におさげ髪。
眼鏡のレンズが厚すぎて、どんな顔をしているのかわからない。

弛緩した指の間をすり抜けた写真は、裏面を上にして床に着地した。
少し黄ばんだそこに写っている少女たちの名前が、丸っこい手書きの文字で記されている。
俺は混乱したまま床にはいつくばり、今度こそ悲鳴をあげていた。

5．中庭の幽霊

校舎の角に切り取られた空の色が青く透明に澄んでいた。
こんな天気は久しぶりだ。
だが、中庭の陰鬱さは相変わらずで、昼休みだというのに人っ子一人いやしない。

「須藤！」
仁王立ちして叫んだ途端、あざ笑うように桜の葉がざわめいた。
「須藤、出て来い、須藤、おい、須藤っ！」
恐らくは、もっとましな方法があるに違いない。
でも、昨夜は一睡もできなくて、俺はまともな判断力を失っていた。

「出てきやがれっ！」
蹴り上げた石が桜の木にぶつかっってはねかえり、まっすぐこちらに飛んできた。
とっさに身をかわしたところに桜の枝が落ちてきて、俺の脳天を直撃した。

須藤正樹はすぐ近くにいた。
「須藤、須藤って連呼しないでよ。僕はここにいるのは、君の話し相手になるためじゃあ、ないんだから」
声のする方に視線を動かすと、桜の枝に腰かけていた。
軽く眉根を寄せたアンニュイな表情を少女めいた顔に貼り付けて、ガラス球のような瞳をこちらに向けている。

「水原のことで話があるんだ。ほらっ、これを見てくれ！」
水原の名前を出した途端、須藤は身を乗り出した。
ドラエモンと幽霊は紙一重だ。

頭上に掲げた写真は、あっという間に少年の手の中におさまっていた。

「水原が、どうして俺のばあちゃんと一緒に写真に写っているんだ？」

「友達だから？」

「バカ言うな！　俺のばあちゃんが生まれたのは昭和3年だぞ！この写真がいつ撮られたと思う？」

写真から顔を上げた須藤は、憮然とした面持ちで唇を歪ませた。

「いちいち熱くならないでよ。冗談だってわからないの？　撮られた時期なんて一目瞭然だ。もんぺの着用が強制的になったのは太平洋戦争の戦局が悪化して以降だから、昭和十八年とか、十九年とか、二十年とか……。それはそうと、君はこの写真に写っているのが、本当に沙耶ちゃんだと思ってるわけ？」

「だって名前が……それに、髪型と眼鏡が……」

「それで、幽霊かも知れないって？」

須藤がふっと笑ったので、俺は赤面して俯いた。

バカ呼ばわりしたのは失敗だった。

こいつの方が、はるかに頭が良さそうだ。

「真相が知りたければ本人に聞くんだね」

「今日も昨日も学校を休んでる」

「だったら見舞いのふりをして直接探りを入れればいい。君の好奇心はその程度なの？！」

らしくない強い口調に、はっと顔を上げた時、須藤は目の前に立っていた。

ガラス球のようだと思った瞳に、今は明らかな感情が宿っている。

「あの子は生まれた時から一人ぼっちだったから、時の螺旋にとらわれてしまったんだ。何とかしたくても、僕はここから動けない。だから君が沙耶ちゃんを救うんだよ！」

時の螺旋って何だ？
救うって、前にも言っていたけど、どういう意味だ？
言っていることは半分もわからなかったけど、俺は圧倒されたまま、相手の顔を凝視した。

「俺に……できることなのか？」
そう口にした途端、暗い海を見ていた青白い横顔が目に浮かんだ。
水原は確かに何かにとらわれている。
頭ではなく感覚でそれを理解した。

「時の螺旋って何なんだ？！」
須藤は無言のままだった。
でも、無視を決め込んでいるわけではなく、言葉を捜しているようにも見える。
昼休みの終わりを告げるチャイムが鳴り出さなかったら、俺はあいつから何かを聞き出せていたはずだった。

腹の虫が情けない声でグウと鳴いた。
「昼食、食べ損ねちゃったね」
苦笑まじりの声の主は、視界から消えていた。
姿は消えても声だけは聞こえるなんて、まるで不思議の国のアリスに出てくるチェシャ猫みたいだ。

「授業中に食べるからいいんだよ」
俺は何もない空間に向かって呟いた。
取り上げられたはずの写真は、ちゃんとポケットの中に戻っていた。

6．校舎（1）

校舎に向かって力走する俺の姿を目ざとく見つけた連中が、教室の窓から身を乗り出すようにして、ぐるぐる腕を振り回している。学年が高くなるほど教室のフロアも上がっていくのが普通だが、この学校の場合は、俺たち二年の教室は最上階の三階にならんでいる。

「早くしろ！」
「あと、三分！」
「坂本君、急いで！」

クラスメイトが窓際で騒ぐものだから、他のクラスの連中も何事かと窓のそばに集まってきた。
午後の授業に少しぐらい遅れた所でどうってことはないけど、進学率の高いこの学校には、見た目はともかく意外と真面目な生徒が多い。
普段は帰宅部でありながら、試合時だけの助っ人として複数の運動部に所属している俺は、みなの期待に応えるべく、自分の足と運動神経だけを頼りに爆走を開始した。

売店でパンとコーヒー牛乳を買い込んで、一気に階段をのぼろうとした時、バーコードみたいな担任でもある数学教師の後ろ頭がちらりと見えた。
このまま追い越して教室に滑り込めば時間的にはセーフだ。
だが、廊下を走り、階段を二段飛ばしし、さらには教師への礼を欠いたことで、指導室に呼び出される可能性も否定できない。

一瞬の思案の後、俺は迂回路を取ることにした。
生徒たちの「きゃっ！」とか「わっ！」とかいう声を完全にスルー

して、職員室と保健室の前では匍匐前進よろしく身をかがめ、反対側の階段を駆け上り、最後の直線コース――つまりは廊下でスパートをかけた。

教室に転がり込んだ所で、わっと沸き起こる拍手と歓声。
その盛り上がりぶりを見て、（こいつらも相当退屈してるんだな）と思った時、何も知らないバーコードが教室に入って来た。
一気に静寂を取り戻した教室で、授業はあたり前に始まった。
教師に見つかることなくパンを食べ終えた俺は、ぼんやりと水原のことを考えているうちに、いつしか眠りに落ちてしまった。

「起こしたら起きろよ、何度、声をかけたと思ってんだ！」
コピー機を操作しながら、桐谷が額に青筋を立てて怒るのも無理はない。
授業の終わる直前に、俺はバーコードに当てられてしまった。
絶対に当たらないと思っていたのに、「今日の月と日の数字の合計の二乗の平方根」というややこしい経過を経て出てきた数字は何と俺の出席番号だった。
爆睡していた俺は、隣で俺の名前を連呼していた桐谷も巻き添えにして、指導室に呼び出された。

6．校舎（2）

「どうして俺まで！？」
「まあ、いいじゃん。埋め合わせに何かおごるよ。マリオのピザなんでどうだ？　お前、好きだろ？」
にっと笑って桐谷の肩に腕を回すと、怖い顔で睨まれた。

「男とメシ食って何が楽しい！？」
「楽しくないか？　俺は楽しいよ？」
嘘をついているわけじゃない。

予定していたデートがだめになりそうで、いつになく取り乱した悪友の顔を見るのは、結構、楽しい。
でも、俺がエキサイトしている本当の原因は、バーコードに託された数枚のプリントだ。

「これを水原に渡してくれ」
その一言で我を失った俺は、もう少しで「須藤の差し金か！？」と叫び出す所だった。
「ついでに休んでいる間のノートもコピーして渡してやれ」
俺たちが指導室に呼ばれたのは、どうやら小言を聞かせるためではなかったようだ。
全国模試でベスト１０に食い込む水原は別格として、理系では俺が、文系では桐谷が、クラスの中ではそこそこだし、ダサい上に暗くて無口な水原には、仲の良い女子なんて１人もいない。
加えて言えば、俺は不本意ながらクラス委員だ。
担任が俺たち二人を派遣することを思いついても不思議じゃない。

「で、水原の家ってどこなんだ？」
何気なく訊ねた途端、「ええっ！」と大げさに驚かれてた
「どこって、知らないのか？　あんなに水原のことを気にかけてたくせに」
指摘されて初めて気がついた。
俺は水原のことを何も知らない。

「そういう匠は知ってんのかよ」
苦し紛れに言い返すと、丸めたプリントで頭をはたかれた。
「俺はお前のそういう所が嫌いなんだよ。興味を持っているようで、本当は全然そうじゃない。中途半端に関心を持たれた相手が気の毒だ」

興味も関心も全くないくせに、桐谷は水原のことをちゃんと知っていた。
「俺たちの教室の窓から赤い屋根の建物が見えるだろ？」
「児童福祉施設のこと？」
何か言いたげな相手の顔を見て、俺はようやく事態を悟った。

水原沙耶は孤児だった。
私立の進学校に通学できるのは学費が免除されているせいで、成績を落すことは許されない。
ださい格好はそのせいではないはずだが、他の女子みたいに服や化粧に何万円もの金をつぎ込むことは不可能だ。

「直哉はお坊ちゃんだからなあ」
言葉の出ない俺を見て、桐谷は困ったように微笑んだ。
「お前の父ちゃん、ものすごいエリートじゃん。いくつも会社を経営していて、世界中を飛び回っていて、こないだなんて、経済誌にでかでかと写真が載ってたぞ」

俺だって、あいつの顔なんて、経済誌ぐらいでしか見たことがない。
浮かんだ言葉を飲み込んで、桐谷のプリントを取り上げた。
「デートだろ？　いいよ、俺、1人で行くから」
「いや、でもさ……」
「1人で行きたいんだ」
桐谷はくっきりした二重の目を見開いて、不思議そうに俺を見た。
何を考えているのか、さっぱりわからないという顔だった。

俺だって、自分が何を考えているのかわからない。
考えることを放棄して、俺は印刷室から飛び出した。

7．校舎（2）

「どうして俺まで！？」
「まあ、いいじゃん。埋め合わせに何かおごるよ。マリオのピザなんでどうだ？　お前、好きだろ？」
にっと笑って桐谷の肩に腕を回すと、怖い顔で睨まれた。

「男とメシ食って何が楽しい！？」
「楽しくないか？　俺は楽しいよ？」
嘘をついているわけじゃない。
予定していたデートがだめになりそうで、いつになく取り乱した悪友の顔を見るのは、結構、楽しい。
でも、俺がエキサイトしている本当の原因は、バーコードに託された数枚のプリントだ。

「これを水原に渡してくれ」
その一言で我を失った俺は、もう少しで「須藤の差し金か！？」と叫び出す所だった。
「ついでに休んでいる間のノートもコピーして渡してやれ」
俺たちが指導室に呼ばれたのは、どうやら小言を聞かせるためではなかったようだ。
全国模試でベスト１０に食い込む水原は別格として、理系では俺が、文系では桐谷が、クラスの中ではそこそこだし、ダサい上に暗くて無口な水原には、仲の良い女子なんて１人もいない。
加えて言えば、俺は不本意ながらクラス委員だ。
担任が俺たち二人を派遣することを思いついても不思議じゃない。

「で、水原の家ってどこなんだ？」
何気なく訊ねた途端、「ええっ！」と大げさに驚かれてた

「どこって、知らないのか？　あんなに水原のことを気にかけてたくせに」
指摘されて初めて気がついた。
俺は水原のことを何も知らない。

「そういう匠は知ってんのかよ」
苦し紛れに言い返すと、丸めたプリントで頭をはたかれた。
「俺はお前のそういう所が嫌いなんだよ。興味を持っているようで、本当は全然そうじゃない。中途半端に関心を持たれた相手が気の毒だ」

興味も関心も全くないくせに、桐谷は水原のことをちゃんと知っていた。
「俺たちの教室の窓から赤い屋根の建物が見えるだろ？」
「児童福祉施設のこと？」
何か言いたげな相手の顔を見て、俺はようやく事態を悟った。

水原沙耶は孤児だった。
私立の進学校に通学できるのは学費が免除されているせいで、成績を落すことは許されない。
ださい格好はそのせいではないはずだが、他の女子みたいに服や化粧に何万円もの金をつぎ込むことは不可能だ。

「直哉はお坊ちゃんだからなあ」
言葉の出ない俺を見て、桐谷は困ったように微笑んだ。
「お前の父ちゃん、ものすごいエリートじゃん。いくつも会社を経営していて、世界中を飛び回っていて、こないだなんて、経済誌にでかでかと写真が載ってたぞ」
俺だって、あいつの顔なんて、経済誌ぐらいでしか見たことがない。

浮かんだ言葉を飲み込んで、桐谷のプリントを取り上げた。
「デートだろ？　いいよ、俺、1人で行くから」
「いや、でもさ……」
「1人で行きたいんだ」
桐谷はくっきりした二重の目を見開いて、不思議そうに俺を見た。
何を考えているのか、さっぱりわからないという顔だった。

俺だって、自分が何を考えているのかわからない。
考えることを放棄して、俺は印刷室から飛び出した。

8．海（1）

赤い屋根の建物が私立の養護児童施設だということぐらいは知っていた。
でも、実際に足を踏み入れたことなんかないわけで、門のあたりでウロウロしていると、七歳か八歳ぐらいの女の子が興味津々という面持ちで近づいてきた。

「どちらさまですか？」
幼い声でおとなびたことを言う。
細い首をかしげると、まっすぐな髪がさらりと揺れた。
前髪の隙間から覗く眉毛が愛嬌があって、何だか雪ダルマみたいだ。

「水原……さん、いる？」
少女は値踏みするように視線を動かした。
「お兄ちゃん、沙耶ちゃんの彼氏？」

彼氏？
誰が？　誰の？
ひょっとして俺？
俺はなぜか動揺し、「違う」とひとこと言えば済むことを、その何十倍もの言葉を使って女の子の言葉を否定しようとした。
「俺はただのクラスメイトで、バーコードに言われてここに来ただけで、彼氏だなんてことはありえない。いや、ありえないというのは言い過ぎかもしれないけど、実際にそんな事実はないわけで……」

「真由ちゃん、お客様なの？」
大人の声にぎくりとした。
挙動不審で、あるいは少女誘拐の嫌疑をかけられて、通報されては

たまらない。
回れ右して退散しようとした途端、女の子に制服をつかまれた。
門を押し開けて出てきたのは、ふっくらした印象の五十歳ぐらいの女の人だった。
「何か、ご用ですか？」
「あ、あの……水原沙耶さんの」
「沙耶ちゃんの彼なんだって！」

自信満々で報告されて唖然となった。
雪ダルマめ、全然人の話を聞いてない。
なぜか誇らしげに胸をはっている女の子と、じりじりと後ずさりする俺を見て、施設の職員と思われるその人は、細い目をさらに細くして微笑んだ。

「この道をまっすぐ行って、道路を渡るでしょ。そうしたら海が見えるから……」
水原はどうやら海が好きらしい。
熱を出して寝込んでいても、少し目を離すと海を見に行ってしまうのだという。
「これ、渡してくれる？」
差し出されたレモンイエローのカーディガンを受け取って、教えられた道をたどっていくと、雪ダルマ追いかけてきた。

「ね、バーコードって？」
なんだ、ちゃんと聞いてたんじゃないか。
担任のあだ名だと答えると少女は目を丸くした。

「学校の先生に言われて来たんだ」
「そう、だから俺と水原は……」

「うん、それはわかってる」
気を取り直したように笑顔になった雪ダルマは、飛び跳ねるようにして前に回りこんできた。

「お兄ちゃんは沙耶ちゃんとは無関係。沙耶ちゃんは友達も彼氏も作らない。いつも1人で海を見てる。きっと沙耶ちゃんの大切な人は海の向こうにいるんだよ」
どこか歌うような口調だった。
（からかってんのか）
心の声が聞こえるはずもないのに、少女は一歩後ずさり、ひらひらと手を振った。
「嘘なんかじゃないよ。あのね、沙耶ちゃんはね……」

「別の世界から来たんだよ」
聞き間違えでなければ、そう聞こえた。
俺は混乱し、駆け去ってゆく少女の足音を背中で聞きながら、しばらくの間、動けなかった。
思いあたることがないではなかった。
いやむしろ、ありすぎた。

水原はそこにいた。
ジーンズにポロシャツという組み合わせのアピール度は限りなくゼロで、見慣れた制服姿の方が何十倍もましのはずだ。
でも、目の前にいる水原は眼鏡をかけてはいなかった。

ほどいた髪が海風でひるがえり、覆うもののない横顔がオレンジ色に染まってみえた。
いつの間にか燃えるような夕焼けが辺りを包んでいて、どこにでもありそうな海辺の風景をいつものは全く別のものに変えていた。
セピア色の写真に薄赤のフィルターをかけたらこんな色になるかも

知れない。
幻想的な色彩に包まれて、水原沙耶はこわいほどきれいだった。

9．海（2）

きれいで、静かで、他の者を拒絶するような光景に圧倒されながらも、俺は何とか気を取り直し、「水原」と心の中だけで呼びかけてみた。

（……やばいかも……）

本番前のシミュレーションは一瞬で終ったけど、実行に移す勇気が全く出てこない。

俺はしばらく逡巡し、唇を真一文字に引き結び、わざと大きな足音をたててターゲットに近づいた。

七メートル、六メートル、五メートル……近づくほどに激しくなる胸の鼓動。

担任に押し付けられたプリントとノートのコピーを渡すだけの行為が、相手が水原というだけで、特別な意味を持つ気がした。

四メートルほど手前まで近づいた所で、水原はゆっくりとこちらに顔を向けた。

目が合った途端、妙な電流が身体を走り、電池切れのおもちゃか何かのように俺は動きを停止した。

無言でこちらを見つめている。

夕焼けにも染まらぬ瞳は夜を閉じ込めた海の色だった。

（直哉はさ、好奇心で身を滅ぼすタイプだよ）

まるで、今がその時だと言わんばかりに、桐谷の声がふと胸をよぎった。

（お前は恵まれ過ぎている。家は金持ちだし、ルックスもいいし、運動神経も、理数に限って言えば成績もいい。俺のことをプレイボ

ーイなんて言ってるけど、派手なスタンドプレイで注目を浴びているのはお前の方だ。みんなお前に近づきたがっているし、望めばたいていのものは手に入る。だからいつも退屈していて、暇つぶしのタネを探しているんだ）

あの時は、責めるような口調にむっとした。
俺と桐谷は中学一年の時からの付き合いだ。
両親の仕事の関係でずっとオーストラリアで暮らしていた桐谷が、妙な日本語をからかわれて上級生と取っ組み合いの喧嘩を始めた時、唯一加勢してやったのが俺だった。

あれも好奇心から出た行動だったのか。
帰国子女というレッテルに興味を覚えてのことだったのか。
今となっては、自分でもよくわからない。
でも、過去のことなんて、今はどうでもいい。

水原沙耶は危険だと、頭の中で警鐘がけたたましく鳴り響いている。
俺の想像が少しでも当たっていれば、本当に身を滅ぼすことになりかねない。
動かなくなった俺の代わりに、ダサいつっかけをひっかけた白い足がこちらに一歩踏み出した。

五メートル、四メートル半、四メートル。
「坂本君？」
三メートル半まで近づいた所で、水原は軽く息を飲み、俺の名前を口にした。
ふんわりとした暖かな声だった。
強固な鎖のようだった緊張は嘘のように氷解し、俺は肩で息をした。

「眼鏡がないとよく見えないの」

プリントを大切そうに受け取った水原は、「ありがとう」という言葉に「ごめんね」という言葉を付け加えた。
だから、こっちを凝視していたのか。
必定以上に緊張した自分が恥ずかしくなり、三つ編みをほどいた髪がゆるいウェーブを描きながら揺れるのを目の端におさめながら、俺は無言で頷いた。

「今日も中庭で須藤に会った。水原がいないと見えないのかと思ったけど、そうでもないみたい」
体調のことを気遣わしげに訊ねられ、俺は強いて笑顔を作った。
「全然平気。俺、基本的に丈夫だから」
なおも何か言いたげな水原の胸にカーディガンを押し付けると、水原はなぜか赤くなり、小さな声で礼を言った。

「芳江って、ひいばあちゃんの名前なんだ」
無言で俯いている横顔を観察しながら、俺はパンドラの箱を開ける決意を固めていた。
視線で促すと、水原は素直についてきた。
道路を渡った所にあるちっぽけな公園で、塗りの剥げたブランコが二つ揺れていた。
そのうちの一つに腰かけると、水原はもう一つに腰掛けた。

小学六年生の時に俺は親父に引き取られた。
それまで俺は、自分の肉親はこの世の中に芳江ばあちゃんだけなんだと思ってた。
ばあちゃんが、曾ばあちゃんだということさえ知らなかった。
曾おじいちゃんも祖父母も両親も知らない。
親の反対を押し切って、妻子ある男と駆け落ちした母親は、救急車で担ぎこまれた病院で、俺の命と引き換えに世を去った。

男に捨てられた母は、別の男の愛人になっていた。
その男にも捨てられ、故郷に帰ることもできず、身重の身体で無理をしたことで命を縮めてしまったのだ。
正妻が死に、跡取りのいなかった男は、かつて捨てた愛人が生んだ自分の子を、半ば強引に引き取った。
老齢の曾祖母は何も言えなかった。
そして誰にも見取られることなく、ひっそりと死んでしまったのだ。

「ばあちゃんが一人で亡くなった時、遺品と言えるものは古いアルバムと日記ぐらいしかなかった。日記には鍵がついていたから、読もうなんて思わなかった。でも、このアルバムの中にこの写真を見つけた時、気が変わったんだ」

写真の撮られた時期と日記の書かれた時期は一致していた。
八十年の人生の中で、ばあちゃんにとってもっとも濃密な時間。
それは坂本芳江にとっては青春の日々であり、この国の歴史の中で最も不幸な日々でもあった。
日記にたびたび登場する親友の名前。
当時、近所でも学校でも評判だったという美貌の少女の名は、水原沙耶といった。

10．好奇心

「寒くない？」
着ている上着を差し出すつもりで言ったのに、水原は拒絶するように首を横に振った。
いやいやながらも俺とのツーショットに甘んじているのは、セピア色に変色した写真のせいだろう。

まっすぐな瞳は、飽きることなく写真に向けられている。
きれいな瞳なのに見えないはずのものだって見えるのに、写真との距離はわずか十センチ。どうやらビン底眼鏡はダテではなかったようだ。

「……水原……お前さ……」
背中を思い切り後ろに逸らしてブランコをひとこぎすると、茶色に変色したブランコがきしんだ音をたてた。
前髪のすきまから覗く夕焼け空の一部が薄墨を流したようにほの暗い。
空には一番星が輝いている。

「幽霊なんかじゃ……ないよな？」
言ってから、ちらりと相手を流し見ると、一瞬だけポカンとなった水原は、肩を竦めてふふっと笑った。

「幽霊だったら、どうする？」
少し意地悪い笑顔だった。
「どうするって……」
言葉につまった俺を見て、水原は笑みを深くした。
「取り殺されたくなければ、かまわないで」

「……」
何も言えずに固まっていたのは、ほんのわずかな時間だったと思う。
「お、おい、ありえないだろ！？」
俺はブランコから立ち上がり、手を伸ばして水原から写真を取り上げると、ビン底眼鏡におさげ髪の女の子を指差した。
「だ、だって、これ、お前じゃないし！」
水原は超度級の天才だけど、俺だってばかじゃない。
加えて言えば、俺の視力は両眼とも２．０だ。
虫眼鏡だって持っている。
水原は写真の女の子とは別人だし、加えて言えば幽霊なんかじゃない。
「幽霊は風邪をひいて学校を休んだりしない。触れれば体温だってあるし、抱き上げれば重いし、どう見たって生身の人間だ！」
逃げ出しそうな腕をつかむと、水原の顔が泣きそうに歪んだ。
明らかにいやがっている。
公園でこんな体勢を続けていたら、警察に通報されかねない。
それでも、ひるみそうになる心を叱咤して、腕をつかむ手に力をこめた。
わけのわからぬ何かにせきたてられるように、夢中で声を張り上げた。
「ばあちゃんの日記に登場する水原沙耶は、切れ長の目が印象的な大人っぽい美少女だ。老舗の旅館の一人娘で、三つ年上の恋人が出征した途端、花婿候補が山ほど現れた。男物の瓶底眼鏡はばあちゃんの入れ知恵だ。でも、恋人は戦死し、水原も亡くなった」

「お前は誰だ」と聞いたのは、水原を追い詰めるためなんかじゃなかったのに、焦点をなくした少女の瞳からぽろりと涙がこぼれ落ちた。
「どうして泣くんだ！　ただ、俺は、お前を……」
そこまで口にした所で思考が停止した。

俺は……水原を……何だっけ？
どうしても言葉が浮かばない。
答えはすぐそこまで近づいているのに、あと少しのところで手が届かない。

水原が、ばあちゃんの名前を口にした日から、俺は水原のことばかり考えている。
よしえなんてよくある名前だし、聞き間違いで済ましてしまう程度の小さな声だったはずなのに、俺はその時から、水原の存在を強烈に意識し始めた。
彼女と一緒にいても、友達とさわいでいても、指導室に呼び出されていても、頭の隅っこにはいつも水原が居座っている。

ださい眼鏡に古臭い髪型。
仲の良い友達もいなければ、教室で笑顔を見せることもない。
でも、抜けるように色が白くて、制服の襟からのぞく首筋は折れそうに細い。
少しぽってりした唇は柔らかそうだ。

何もない空間に向かって、ふっと微笑みかけることがある。
細い指が暗号のような言葉を虚空に刻むのを見ていると、ドキドキする。

水原のことをもっと知りたい。

眼鏡の下の瞳を見てみたい。
水原にも俺を見て欲しい。
俺の存在に気付いて欲しい。
好奇心？
いや、違う。

「そうだ、俺は水原が好きなんだ」
思いを口にした途端、ひっぱたかれた。
受け取ったプリントをそこらじゅうにぶちまけた水原は、俺の拘束をほどいて逃げ出した。
そんなに俺が嫌いだったのか？
頬に手を当てたまま、茫然と視線を動かすと、空には一番星が光っていた。

11．輪廻

「バカだね」
桜の木の枝に腰掛け、足をぶらぶらさせながら、須藤正樹は形の良い唇をシニカルな笑みの形に歪めてみせた。
「そんな状況でそんなくだらない冗談を飛ばされたら、誰だって相手をはりとばしたくなるはずだ」
「冗談なんかじゃ……」
「本気なの？」
声のトーンが少しだけまじめなものとなり、身を乗り出した次の瞬間には、須藤は同じベンチに座っていた。
「すごい、紫色になってる。よっぽど君のことが嫌いなんだ」
まじまじと俺の顔を覗き込み、左の頬の青あざを、少女めいた細く白い指で無遠慮に指差してくる。
俺はむっとして立ち上がった。
こいつの言うことはいつだって毒がある。頬が微妙にはれ上がり、いやな感じに変色しているのは、水原のせいじゃない。

朝一番でみちるを呼び出した。
別れを切り出されて、みちるがわっと泣き出したところに、颯爽と登場したのは桐谷だった。
思い切り殴られて、桐谷がどれだけみちるのことが好きなのかを理解した。
そして、同時に気がついた。俺はこれまでに何人もの女の子と付き合ってきたけど、本当に好きになった子なんて一人もいなかった。
「新たなカップルの誕生ってこと？　君たちの恋愛は本当に短絡的だな。沙耶ちゃんに対する思いもその程度なんだろ？」
須藤は意地悪い笑みを浮かべていたが、かたくなに否定する俺を見

て、不快げに眉を寄せた。
この男が表情を変えるたびに、背後の桜の巨木がざわめいて、俺の背筋を冷たいものが這い上がる。
怖いとは思わないけど、やばいとは思う。
外見の可憐さとは裏腹に、生きている人間をとり殺したりするのは、きっとこんなやつだろう。

「みちるって子と付き合っていたんだろ？　それなのに、どうしてそんなに簡単に別れることができるんだ？　沙耶ちゃんを救って欲しいといったことは取り消すよ。君みたいないい加減な人間に彼女が救えるはずがない」
　須藤は断言し、野良猫でも追い払うように手を振った。
「沙耶ちゃんに近づくことも、ここに来ることも許さない。君が来るようになってから、沙耶ちゃんが来てくれなくなった。僕の唯一の楽しみを奪う権利は君にはないはずだ」
　自分の身の安全のために、須藤の言葉に従うべきだということは、頭の中ではわかっていた。
けれども、俺はそうしなかった。
そうする気なんか微塵もなかった。

「水原をどうするつもりだ？！」
須藤はこちらを流し見た。「虫けらでも見るような」という表現がぴったりのまなざしだ。

ここで目を逸らしてはおしまいだと、俺は自分に言い聞かせた。
須藤を味方につけなくては、水原の謎を解くことはできない。

気持ちを落ち着けるために、わざとゆっくりと息を吸い込んだ。
須藤はベンチに腰掛けたまま、彫像のように動かない。
切り捨てるような言葉や態度とは裏腹に、俺の反応を待っているよ

うにも見える。

「お前の言うことは間違っていない。確かに俺はいい加減だった」
「おや」とでも言うように、須藤の形のよい柳眉が持ち上がる。
開きかけた唇をふさごうと、俺は早口でまくしたてた。
「ばあちゃんが死んでから、俺は他人のことにも、自分のことにも、全然興味が持てなくなった。好奇心をかきたててくれる何か、俺をおもしろがらせてくれる何かを無理やりこさえては、現実から目を逸らしていたんだと思う」

桜の枝が突然ざわめき、強い風が渦巻いた。その風になぎ倒され、地面にはいつくばった俺を見下ろして、紅を刷いたような赤い唇が綻んだ。
「目を逸らさなきゃならないほど、君の現実は悲惨なの？」
須藤は笑ったがその目は笑っていなかった。
「君が沙耶ちゃんに興味を持つのは当然だ。彼女は可愛いくて、謎めいていて、はかなくて、男なら誰でも手を差し伸べたくなっちゃうよね。わかったよ。僕はもう一度、君に望みを託すことにする。沙耶ちゃんの秘密も教えてあげる。その代わり、彼女を救うのは命がけだ」

「命がけ？」
「そう、命がけ」
氷のように冷たい指がゆっくりと俺の顎を持ち上げた。
「沙耶ちゃんはね、前世の記憶を持って生まれてきたんだ」
表情をこわばらせた俺の顔に、須藤の顔が近づいてくる。
至近距離から合わせた瞳は漆黒で、ブラックホールを覗き見ているようだった。
「前世で結ばれなかった恋人が迎えにきてくれるのを、彼女は今も

待っているんだよ」

前世で結ばれなかった恋人。
それは、ばあちゃんの日記に登場する学徒動員で戦場に借り出された、青年将校に違いない。
当時、不沈艦と言われていた戦艦大和に乗り込み、そのまま戻って来なかった男の名は……。

「北村修司――沙耶ちゃんは、しゅうちゃんって呼んでる」
心の声を読み取ったかのようなタイミングの良さで、須藤が男の名を口にした。
「北村はきっと迎えに来るよ。海の底を歩いて戻ってくる。いちおう、お仲間だからね。会ったことはなくても、僕には彼の考えていることがわかるんだ。沙耶ちゃんは連れて行かれちゃうよ。彼女を救うのは命がけだっていうのは、そういう意味なんだ」

「応援はする」
そういい残して、須藤は姿を消してしまった。

（あの瞬間も水原は待っていたんだな）
海を見ていた水原の横顔を、俺はぼんやりと思い出していた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3552f/

時の螺旋

2010年10月9日16時55分発行